

勝呂 徹教授送別の辞

土谷 一晃

東邦大学医学部整形外科学講座（大森）教授

勝呂 徹教授の退官に際しまして、東邦大学整形外科学教室を代表してお礼の言葉を述べさせていただきます。

勝呂教授は昭和47年に千葉大学医学部を卒業後、整形外科学を専攻され、平成元年に、東邦大学整形外科学講座の講師として赴任されました。

平成9年に整形外科学講座教授に就任され、足掛け23年間にわたり、東邦大学整形外科学教室の発展と整形外科医の育成に尽力されました。赴任当時から、常に、医局員の中に入り、整形外科の基礎から臨床まで手取り足取り教えている姿をみて、教育者としての真摯な姿勢に感銘を受けたことを思い出します。

勝呂教授は整形外科学のあらゆる領域に卓越した知識と技術をお持ちです。特に関節リウマチおよび類縁疾患の基礎的な研究、診断と治療のほか、国内における関節外科の第一人者として、新しい手術法や人工関節の開発にも尽力され、多くの功績をあげられました。特筆すべきは、手術の技術で、関節外科は言うに及ばず、整形外科のすべての領域の手術で卓越した技術をお持ちで、国内ではトップレベルの成績をあげられています。

勝呂教授は、整形外科のみならずあらゆる領域に豊富な知識をお持ちで、大学人として見本となるべき立派な教育者です。私ども医局員には、時には厳しい時もありましたが、多くのことを教えていただきました。私自身も、外科医としての基本姿勢、手術の基本、教育、学会活動や運営など、多くのことを学ばせていただきました。手術に関しては、医局員全員が懇切丁寧に技術指導していただきました。勝呂教授に鍛えられた手術の技術は東邦大学整形外科の医局にとって貴重な財産です。勝呂教授からみればまだまだかもしれませんが、東邦大学卒業の優秀な整形外科医をたくさん育てられたと思っています。

日常診療では、たくさんの患者さんが先生の診察を希望されました。また、医局員が大きな学会でシンポジストやパネリストとして口演し、医局員各自が整形外科学の深さを知り、多くの知識や技術を修得できたことなどは、すべて勝呂教授の功績です。

学会関連では、日本整形外科学会、日本リウマチ学会、日本人工関節学会、日本関節症学会、日本整形外科スポーツ医学会、Japanese Orthopaedic Society of Knee, Arthroscopy and Sports Medicine (JOSKAS)、日本画像医学会などの理事をはじめ、多くの学会の役職を務められました。

開催した学会は、第55回日本リウマチ学会、第39回日本人工関節学会、第35回日本リウマチ・関節外科学会、第33回日本膝関節学会、第24回日本画像医学会、第29回日本骨・関節感染症学会など、大きな学会だけでも10を超える学会を主催されました。

一方、平成22年からは、経済産業省の医療サービス国際化推進事業委員として、経済産業省の医療ツーリズムの第一号患者を東邦大学医療センター大森病院で受け入れるなど、日本の医療技術の国家的なアピールにも貢献されました。

今後は、国際的な整形外科医の育成などにも熱意をお持ちのようで、さらに、日本では、関節リウマチや関節外科のお仕事も継続されるとのことです。なかなか、体をお休めになりませんが、体調には留意され、引き続きご活躍いただきたいと思っています。今後は、東邦大学名誉教授として、引き続き私どもをご指導いただきますようよろしくお願い申し上げます。

勝呂先生、長い間、東邦大学整形外科のために多くのご尽力をいただきまして、本当にありがとうございました。